



社会福祉法人川上保育園（佐賀市）での「さが生まれ牛乳」贈呈式

J-MILK REPORT

vol-29
2018. SUMMER

特集 愛してミルク？ ～6月1日は世界牛乳の日・6月は牛乳月間～

- 06 インタビュー
「飢餓ゼロ」へ、私たちにできること
～SDGsの実現に向けた酪農乳業の役割～
小沼 廣幸 氏
(明治大学 国際連携機構 特任教授 アセアンセンター センター長)
- 07 乳の学術連合の窓
普及に寄与する研究の充実を
～牛乳乳製品の価値と情報発信～
上西 一弘 氏(女子栄養大学 栄養学部 教授)
- 08 平成 30 年度の生乳及び牛乳乳製品の
需給見通しと今後の課題について
- 10 酪農乳業産業基盤強化特別対策事業の経過報告
- 11 「牛乳は生きている」
～風味変化問題への取り組み～
- 12 産地の見える牛乳で、進化する乳和食とともに
永利牛乳が牛乳月間に「乳和食ワークショップ」を開催！
- 12 おいしく減塩！乳和食レシピ
「ごちそう冷や汁」
- 13 酪農乳業の課題と
持続可能な開発目標 (SDGs) の関わり
- 14 IFCN Dairy Conference 2018 最新レポート
竹下 広宣 氏(名古屋大学大学院 生命農学研究科 准教授)
- 15 インフォメーション
・明治 150 年関連施策「酪農乳業産業史を活用した
競争力強化事業」の経過報告
・コンテンツのご紹介
・J-Milk Schedule



6月1日は世界牛乳の日!
6月は牛乳月間

2018年の取り組みをまとめました。

第1弾

「牛乳で乾杯！」SNSで写真投稿キャンペーン

6月1日のWorld Milk Day(世界牛乳の日)は「写真投稿で世界とつながる」、6月の牛乳月間は「写真投稿で全国のミルクファンとつながろう」と銘打ち行った今年の「牛乳で乾杯！」キャンペーン。公開されているFacebook(以下FB)、ツイッターでは、牛乳の日関係で6月1日~2日に約1,000件の投稿があった。『#世界牛乳の日2018』では、インスタグラム232件(前年146件)、FB78件(前年34件)、『#牛乳月間』では、インスタグラム138件(前年41件)、FB40件(前年25件)の投稿があり、昨年を大きく上回った。



ジェロウ・ボードイン氏
Global Dairy Platform (GDP)
コミュニケーション担当役員

Message from GDP

2018年のワールドミルクデー(世界牛乳の日)のイベントは、72か国で計586件開催されました。#WorldMilkDay、#RaiseAGlassなど関連する19種類の各国独自のハッシュタグでのSNS閲覧回数は計11億、6月1日~2日にかけての投稿は8万件以上あり、牛乳に関するポジティブな記事は、ネガティブな内容に比べて約45倍も多く投稿されました。積極的に酪農乳業のポジティブな記事が共有され、特に日本は、世界で2番目に多くイベントが開催されたことを、私たちは大変嬉しく、誇りに思っています。

ワールドミルクデー当日は、全世界における関連報道の約5分の1(19%)に、主要な牛乳のテーマ(栄養、持続可能性、開発)の1つが含まれていました。なかでも「栄養」のテーマが最も多く、栄養の利点を語るインフルエンサーは、栄養士、シェフ、オリンピックの選手からNFLのフットボール選手にまで多岐にわたり、牛乳のメリット(骨の形成からスポーツ持久力まで)を促しておりました。これらの活動は多くの人々に牛乳の栄養価値を思い起こさせ、ワールドミルクデーをより広く伝えることができたと思っております。

改めまして、「牛乳で乾杯!(Raise a glass!)」に参画してくれた日本の多くの皆様に感謝申し上げます。

「愛してミルク？」ツールの活用事例をご紹介します。

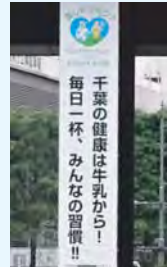
今年度は缶バッジとステッカーを新たに制作。スタッフ全員が缶バッジを着用したり、イベントの参加賞としてステッカーを配布するなどの活用が多くみられた。その他、「牛乳で乾杯！」や「愛してミルク？」のロゴ、牛乳月間用ポスターの活用事例をご紹介します。

懸垂幕と横断幕

各県庁ビルに懸垂幕を掲げた。愛知では県酪建物にも使用するほか、横断幕も制作。6月1日の街頭活動や中央生乳(株)の駐車場フェンスにも活用した。



愛知県牛乳普及協会



千葉県牛乳普及協会

のぼり

「愛してミルク？」のロゴを活用したのぼり。広島ではロゴと共に「広島県産牛乳と乳和食で健康長寿を延ばそう！」を明記し、認知度UPを図っている。



広島県牛乳普及協会



雪印メグミルク株式会社

エプロン・帽子に缶バッジ着用

各企業・団体オリジナルのエプロンや帽子に缶バッジを着用。他には、乳和食等の料理教室で参加者に配布し、イベント当日付けてもらうなどのアイデアも。



ホクレン農業協同組合連合会



よつ葉乳業株式会社 中央酪農会議

オリジナルTシャツ

「愛してミルク？」のロゴを活用したTシャツを制作。ミルクを意味した「369」がバックプリントされ、後ろ姿は競技場へ向かう勇ましい選手のような見た目。

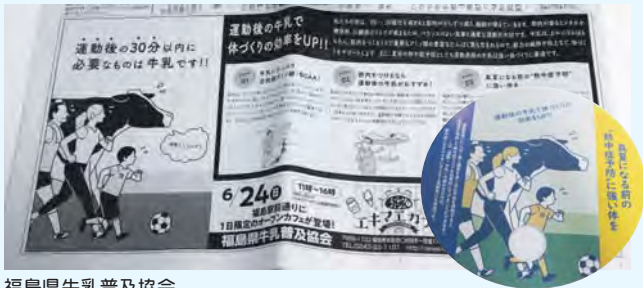


広島県牛乳普及協会、広島県酪農業協同組合



新聞広告とうちわで訴求

イベントに際し、共催した福島民報社の新聞に牛乳月間用ポスター(乳和食と熱中症2種)の素材を活用した広告を掲載。オリジナルうちわは参加者に配布した。



福島県牛乳普及協会

バックパネル

左下は昨年度のポスターを格子柄に活用した。右下は広島県酪、広島県牛乳普及協、中酪、Jミルクのロゴがコラボした持ち運び簡単なバックパネル。



中央酪農会議



広島県牛乳普及協会

クリアファイル

裏表で「MILK JAPAN」と「愛してミルク？」がプリントされたクリアファイル。



宮城県牛乳普及協会

来客スペース PR

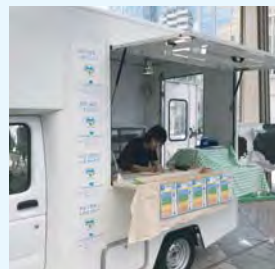
JAビル34階にリーフレット、ポスター、酪農部手作りのかわいい小物を配置。



全国農業協同組合連合会

牛乳販売店カーとコラボ

車に「牛乳で乾杯！」のチラシを貼り、『牛乳購入→写真撮影→SNS投稿→缶バッジ・ステッカーをプレゼント!』という流れ。六本木牧場のイベントで行った。



株式会社川和ミルク



第3弾

全国各地をJミルク役職員が取材訪問！

会員の皆様より4月下旬から6月にかけて収集した全国のイベント情報をもとに取材させていただき、即日にJミルクの公式Facebookへ記事と写真を投稿しました。取材にご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。ここでいくつかご紹介いたします。

北海道



ミルククロスステーション

共催／北海道牛乳普及協会、ホクレン農業協同組合連合会
北海道どさんこプラザ札幌店では、札幌ベルエポック製菓調理専門学校カフェ科の学生が考案した、道産牛乳×道産青果のミルクドリンク4種を販売。「とろとろ長いもミルクシェイク」が大人気だった。

北海道



北海道コンサドーレ札幌の選手を牛乳とお米で激励！

共催／よつ葉乳業（株）、JAグループ北海道
6月の牛乳月間と食育月間を掛け合わせ、7月18日からの後半戦を控える選手たちへ道産牛乳とお米を贈呈。選手たちは年間で贈呈される「特選よつ葉牛乳」などを毎日必ず練習後に飲んでいる。

岩手



銀河食堂で乳和食定食

主催／全農岩手県本部 協力／岩手県牛乳普及協会
盛岡市内にある「銀河食堂」では日替わりで乳和食定食を提供。写真は「肉団子の玉子のせあんかけ」。トマトベースの甘酢あんと肉団子に約50mlの牛乳を使用し、健康志向の女性に好評だった。

宮城



おおさき食楽まつり2018

主催／食楽まつり実行委員会 協力／宮城県牛乳普及協会
毎年恒例、鳴子温泉峡で開催するご当地グルメの祭典は、延べ2万人が来場する。「みやぎミルクレディ」が牛乳試飲コーナーで華を添え、昨年に引き続き、「愛してミルク？」のオリジナルグッズを配布した。

秋田



ミルクフェア2018

主催／秋田県牛乳普及協会
イオンモール秋田では、抽選で乳製品が貰えるクイズラリーやバター作り体験、骨密度測定などの親子で楽しめるイベントが開催され、家族連れで賑わった。大スクリーンに「愛してミルク？」のロゴを掲示し、6月の牛乳月間をPRした。

山形



6月1日朝7時～！高校生に県産牛乳等を配布

主催／山形県牛乳普及協会
おそらく国内で一番早い牛乳の日イベント。山形駅では、登校中の高校生500人を対象に、山形県産牛乳と米粉パン、啓発リーフレット等を配布。牛乳の日や朝ごはんの大切さをPRし、高校生たちからは喜ぶ声が聞こえた。

千葉・神奈川



牛乳料理コンクール関東大会最優秀賞「ミルクらあめん」試食イベント

主催／関東生乳販売農業協同組合連合会
スーパーマーケットのマルエツ北柏店と井土ヶ谷店で試食イベントを実施。最初は牛乳とラーメンの組み合わせに驚く方が多かったが、「コクがあっておいしい」と好評。

栃木



「6月16日県民の日記念イベント」に参画

主催／栃木県庁 協力／栃木県牛乳普及協会
県民が郷土について理解と関心を深め、より豊かな栃木県を築き上げるために制定したイベント。県庁前広場で県産牛乳の飲み比べやバター作り、入浴剤作りを行った。

東京



つごもり市ミルクフェア(5/25キックオフイベント)

主催／JA全中 協力／JA全農、協同乳業、東北協同乳業、よつ葉乳業、蔵王酪農センター
JAビル4階「ミノール」にて牛乳乳製品を販売。牛乳をお買い上げの方には全農酪農部企画の「ミルクde混ぜ混ぜコーナー」を無料で提供した。

東京



六本木ヒルズに牧場が来た

主催／中央酪農会議
第5回目となる「六本木牧場」。今年もJミルクが「愛してミルク？」ブースを出展し、牛乳販売店の川和ミルク、中酪、全農、全酪連と連携し、「牛乳で乾杯！」の写真撮影を行い、業界関係者が一体となって、「世界牛乳の日・牛乳月間」をPRした。



千葉・静岡

おいしいミルクセミナー

主催/日本乳業協会
共催/中央酪農会議、Jミルク
浦安市と浜松市のホテルにて、地元乳業メーカーを含む5社協力のもと、延べ570人が参加。小山浩子先生の乳和食デモと試食の他、女子栄養大学の西上一弘教授、近畿大学の伊木雅之教授がそれぞれ講演された。浦安会場では、最後に参加者と牛乳で乾杯！



茨木

「明治なるほどファクトリー」で工場見学

主催/株式会社明治
牛乳月間の催しのひとつとして開催。親子連れと夫婦の参加が多く、ヨーグルトの製造ライン等を見学したあと、専用の食育ルームでバター作り体験とともに、牛乳乳製品の知識や食育について楽しみながら学んだ。



千葉

ミルクフェスティバル2018

主催/千葉県牛乳普及協会
千葉県酪農農業協同組合連合会 県立北総花の丘公園では、子供たちが酪農の仕事を遊びながら体験できる牧草運びや搾乳模擬体験などを開催。メインステージで小山浩子氏が乳和食を紹介し、小山氏監修のイベント限定「ミルクドーナツ」を販売した。



神奈川

「2018tvk秋じゃないけど収穫祭」で牛乳5,000本配布(5/26-27キックオフイベント)

主催/テレビ神奈川
協賛/神奈川県牛乳普及協会
神奈川県33市町村をはじめ全国各地の「農林水産物」「伝統工芸品」「観光地」「人」の魅力を伝えるイベント。横浜公園や日本大通り周辺で開催され、アンケートに回答した来場者には牛乳を配布した。



福岡

九州Love Milk Club ハッピーミルクフェスタ2018

主催/九州生乳販売農業協同組合連合会
イオンモール福岡では、等身大模型牛で乳しぼりと子牛にミルクを飲ませるお世話体験、「牛乳ヒゲコンテスト」などの子供が喜ぶ企画を実施。地元FM局の公開収録やステージイベントもタイアップで行われた。



佐賀

「大切な人に牛乳を贈ろう」キャンペーン

主催/佐賀県酪農婦人部連絡協議会、佐賀県牛乳普及協会
佐賀市の(社福)川上保育園では「さが生まれ牛乳」の贈呈式を開催。保育園への牛乳の贈呈は今年で3年目。県内で計3保育園で行われた。また、今年は毎月2回園児たちへ牛乳を届ける予定。



熊本

「ちちの日に牛乳(ちち)を贈ろう！」キャンペーン

主催/熊本県酪農青年部協議会、熊本県酪農情勢部協議会、らくのうマザーズ
県内の酪農家約30名が菊陽町のゆめタウン光の森で牛乳試飲会を開催。全国で毎年恒例となっている父の日イベントは20年前に熊本が発案したとのこと。



宮崎

みやざきミルクフェスタ2018

主催/ JA宮崎経済連
イオンモール宮崎にて「牛乳の日・牛乳月間」の認知度UPや酪農の仕事や牛乳の価値を楽しく理解してもらうため、酪農家と職員総出で、手作りで温かみある体験イベント(乳和食試食、バター作り等)を開催。



チャールズ・ボリコ氏
国連食糧農業機関(FAO)
駐日連絡事務所 所長

Message from FAO

JミルクではFAOが提唱する6月1日のワールドミルクデー(世界牛乳の日)を起点に、全国の小学生に「牛乳ヒーロー&ヒロイン」の絵画を募集しており、応募1作品につき50円を「FAO 飢餓撲滅草の根募金」に寄付しています。ボリコ所長から酪農乳業関係の皆様へ「世界牛乳の日」に関して持続可能な開発目標(SDGs)との関連性の観点からメッセージを頂きました。「SDGsは17項目あり、目標2は『飢餓をゼロに(ゼロ・ハンガー)』です。この目標を達成するためには栄養状態の改善が必要です。牛乳はカルシウムその他、良質なたんぱく質やビタミンも豊富に含まれています。日本のみならず世界中の皆様がいつでも牛乳を入手でき、手軽に栄養を摂取できることを願っています。SDGsと牛乳は繋がっていると私は思います。」牛乳を掲げ、皆の健康を願いながら、お互いに分かちあい、共に支え合うことに乾杯！して下さったボリコ所長。目標17の「パートナーシップで目標を達成しよう」も重要な項目だと感じました。

FAO 駐日連絡事務所HP
「持続可能な開発目標とは？」



「飢餓ゼロ」へ、私たちにできること～SDGsの実現に向けた酪農乳業の役割～

小沼 廣幸 氏（明治大学 国際連携機構 特任教授 アセアンセンター センター長）

国連の「SDGs(持続可能な開発目標)」では、「飢餓をゼロに」を目標の一つに掲げている。すでに国際酪農乳業団体や各国の酪農乳業界が、SDGsを意識した取り組みを始めている。元FAO(国連食糧農業機関)アジア太平洋局長の小沼廣幸氏(明治大学アセアンセンター長)に、持続可能な開発の実現に向けて酪農乳業が果たすべき役割を聞いた。

国際的な視点を持つ人材を日本とアセアンから

— 先生が酪農と関わりを持ったきっかけと、現在のお仕事の内容をご紹介ください。

小沼氏：明治大学農学部での研究が酪農との接点になりました。将来は独立して十勝で酪農をやりたいと思っていましたが、当時は高度経済成長の只中で、小さな農家は次々に廃業して工場労働者になっていた時代です。ちょうどそのころ、青年海外協力隊がシリアで若手の酪農専門家を求めている、即決で応募してシリアに向かいました。当時のシリアでは、私が学んできた知識が酪農指導に役立ちました。その後は、FAOを中心に35年間にわたって国連に勤務してきました。2015年にFAOを退官し、現在は明治大学のアセアンセンター長を務めています。大学では世界の食料安全保障や飢餓、格差問題、国連機関の役割やSDGsに関する授業を担当する一方、センター長としてアセアン全体、特にタイの協定校との連携を進めながら、国際的感覚を持ったアジアの若い人材の育成に取り組んでいます。

飢餓と貧困の解決に貢献できるミルクと酪農

— SDGsには飢餓撲滅という目標が含まれていますが、この点での酪農乳業の役割や価値をどうお考えですか。

小沼氏：いま世界全体では約8億人が慢性的な飢餓状態にあり、5歳以下の子どもの4人に1人が成長不良に苦しんでいます。こうした人々の栄養を改善して飢餓を撲滅することが、SDGsの2030年までのターゲットの一つである「飢餓をゼロに」です。

ミルクは人間が必要とする栄養をバランスよく摂取できるすぐれた食品であり、栄養改善や飢餓撲滅、子どもの成長促進という点で非常に重要な役割を持っています。加えて世界の飢餓人口の35%は南アジアに集中しており、根本的な原因は地方の農村部における雇用や収入の不足です。酪農は家内農業として女性の労働参画も促すことができますから、飢餓撲滅と同時に雇用と収入も確保できます。持続可能な開発の実現という点では、酪農という農業形態にも大きな可能性があると言えます。

食料の生産過程の理解が食品ロス軽減につながる

— 世界の飢餓撲滅のために、私たち日本人にはどんなことができるでしょうか。

小沼氏：我々がすぐ身近に出来るもっとも大きな貢献は、食品ロスの軽減だと思います。現在、日本国内の食品ロスは年間約620万トンに上ると推計されており、私たち一人ひとりが食べ物を尊重して、考え方を変えていかなければなりません。

小沼 廣幸 氏

明治大学 国際連携機構 特任教授
アセアンセンター センター長

1976年明治大学農学部卒。筑波大大学院博士課程前期修了。農学博士。1999年よりFAOアジア太平洋副局長、および同局長を歴任。在タイ国連FAO代表を兼任し、農業振興や栄養改善を指導する。2016年より現職。2017年タイ王冠勳章勲五等を受章。



ポイントは、食品の「価値」を正しく理解することです。例えばミルクの生産過程には酪農家の毎日の営みがあり、労働力だけでなく、飼料、水、燃料やエネルギーも消費しています。つまり1リットルのミルクを捨てるということは、つくる過程で費やされた貴重な資源も捨てるということなのです。また、棄却された食品からはメタンガスが発生し、地球温暖化に悪影響を与えます。食品ロスを減らすためには、こうした食料ができるまでの背景と、食品を無駄にした後のことまで考える習慣を、私たち消費者が身につけることが大切です。また、レストランや社員食堂での食事代金の一部を、飢餓に苦しむアフリカの子どもたちへの食料援助に寄付する“テーブルフオーツウ運動”などを通じて、飢餓撲滅に協力することもできます。寄付分は食事の量自体を減らしてもらうことで、腹八分目にして食べすぎを防ぎながら、飢餓人口の減少にも貢献できるという運動です。このように誰でも気軽に参加できる活動を増やしていくことも必要だと思います。

牛乳乳製品の安定供給のために小規模酪農普及を

— これからの日本の酪農乳業界にはどんなことを期待されますか。

小沼氏：私たちの食生活は牛乳乳製品なしでは成り立たなくなっている一方で、近年は国内生産の不足分を輸入に頼る傾向が強くなっています。しかし、足りない分をすべて輸入に頼るのは、食料の安定的な確保という面で高いリスクがあります。

日本には山間地域の休耕地が多くあります。そうした土地を活用して飼料をつくったり、家内経営的な小規模酪農経営を行ったりする取り組みが、今後ますます重要になるはずで、都府県各地の小規模酪農にもがんばっていただきたいと思っています。

詳細版はこちら



普及に寄与する研究の充実を～牛乳乳製品の価値と情報発信～

上西 一弘 氏 (女子栄養大学 栄養学部 教授)

豊富なカルシウムやたんぱく質による骨・筋肉の健康に加え、高血圧や認知症予防など、牛乳乳製品には多くの価値があることがわかってきた。上西一弘氏(乳の学術連合・牛乳乳製品健康科学会議幹事)に、研究成果を牛乳の普及につなげるポイントを聞いた。

栄養素の組み合わせでカルシウムを有効利用する

—先生のこれまでの研究の経緯と、牛乳乳製品との関わりをご紹介ください。

上西氏：大学の卒業研究がカルシウムに関連した内容でしたから、牛乳乳製品との関わりはその頃からということになります。女子栄養大学に移って最初に取り組んだのは、食品ごとのカルシウム吸収率の研究でした。

もう一つの研究活動として、子どもたちの骨の状態と、食事を含めた生活習慣の関わりを調べています。中高生を対象に2000年から継続調査しており、普段から牛乳を飲んでいる子どものほうが骨の状態が良く、女子については体脂肪率も低いといった興味深いデータが得られています。

—最近関心を持たれているのはどのようなテーマですか。

上西氏：現在の栄養学では、一つの栄養素だけに着目するのではなく、例えばカルシウムはビタミンDとセットにして考えるなど、複数の栄養素の関係性という視点が不可欠になっています。

これを踏まえて、日本人のカルシウム摂取量の伸び悩みという課題に取り組むことが重要です。いまの日本人の平均的なカルシウム摂取量は、50年前とほぼ同じ。現在の食生活に1人1本ずつ牛乳をプラスすればカルシウムの栄養状態は大きく改善するのですが、この目標になかなか届かないのです。牛乳乳製品の摂取を呼びかけ続けることも大切ですが、カルシウムを有効に利用して骨に取り込むという提案も必要だと思います。牛乳はカルシウムが豊富で吸収率も高く、常に身近にあってだれでも手軽に摂れるという点で優れた食品ですから、これとビタミンDをセットにして考えてもらうことが重要です。

また将来的な関心として、栄養素からさらに視野を広げて、食事全体、食品の組み合わせによるカルシウム吸収率の変化も調べてみたいですね。

読み手のレベルに合わせた正確な情報発信が必要

—牛乳はカルシウムを効果的に摂れる食品というお話ですが、研究者のお立場から、アンチミルク情報(牛乳乳製品に関する誤った情報)の流布をどう考えておられますか。

上西氏：科学的根拠のない誤った情報を信じてしまう人がいるのは事実で、特に困るのが管理栄養士のように栄養学を学んだ人が信じてしまうことです。これは正しい知識が不足していることによるものですから、教育や情報発信が必要だと思います。

学校栄養士などの集まりで講演すると、「保護者から牛乳は子どもの体に良くないと言われるが、どう対応すればいいか」といった質問が出ることもあります。私はJミルクのホームページなどを参照するように伝えています。エビデンスに基づいた正確な情報は、保護者への説明にも役立つでしょう。典拠となる論文も含まれた研究者や専門家向けの情報と、一般の人たちへのわかりやすさを重視した情報、さらにその中間と、読み手に合わせて3段階くらいに整理して情報発信するという考え方もあると思いますね。

系統的な研究活動で牛乳乳製品の普及を支えたい

—まとめとして、乳の学術連合の今後の活動に対する抱負やご提案をお願いします。

上西氏：私たちのグループに求められているのは、牛乳乳製品の健康に対する効果を研究し、エビデンスを発信していくことでしょう。その際、骨や体脂肪、血糖値、認知症など、業界として強調したいテーマに重点を置いて、ある程度系統立てて研究を進めるべきではないかと考えます。研究者の自己満足や“研究のための研究”で終わらないためにも、牛乳乳製品の普及に寄与するという活動の軸を共有することが大切だと思います。

—Jミルクとしても今後さらに、エビデンスの収集と社会への発信の両面を充実させていきたいと考えています。本日はありがとうございました。

上西 一弘 氏

女子栄養大学 栄養学部 教授

徳島大学大学院栄養学研究科修士課程修了。雪印乳業生物科学研究所を経て、1991年より女子栄養大学助手、2006年より現職。専門分野は栄養生理学。「日本人の食事摂取基準」(2005、2010、2015年版)策定ワーキンググループメンバー。著書に『栄養素の通になる』(女子栄養大学出版社)など。



牛乳乳製品健康科学会議
乳の学術連合



詳細版はこちら

平成30年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題について

公表：平成30年5月25日

平成30年度第1回需給委員会（平成30年5月16日開催）での協議を経て、「平成30年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題について」を公表した。

生乳生産量の見通し

30年度の生乳生産量は、北海道では3,980千トン・前年比101.6%、都府県では3,287千トン・同97.4%となり、その結果、全国の生乳生産量は7,267千トン・同99.7%となる見通し。

用途別処理量の見通し

30年度の用途別処理量は、「生乳供給量」は7,218千トン・前年比99.7%、「飲用等向処理量」は4,066千トン・同99.8%、「乳製品向処理量」は3,152千トン・同99.5%となる見通し。

牛乳等生産量の見通し

30年度の牛乳等生産量は、「牛乳類」は4,682千kl・前年比99.6%、「はっ酵乳」は1,088千kl・同101.2%となる見通し。

都府県の生乳需給の見通し

30年度の都府県の生乳需給は、「生乳供給量」は3,261千トン・前年比97.4%、「飲用等向処理量」は3,422千トン・同99.0%となる見通し。その結果、北海道から都府県への「移入必要量(道外移出量)」は、需要期を中心に前年水準と比較して増加(472千トン・同105.0%)する見通し。

脱脂粉乳・バター需給の見通し

脱脂粉乳については、30年度の生産量は121.1千トン・前年比99.6%となる見通し。輸入売渡しとして、今後30年度輸入予定数量(27.0千トン)について、需給に対応した必要量が定期的に売り渡される予定となっていることから、30年度末在庫量は63.4千トン(前年度末比▲1.7千トン)となる見通し。

バターについては、30年度の前年比99.8%となる見通し。輸入売渡しとして、今後30年度輸入予定数量(13.0千トン)について、需給に対応した必要量が定期的に売り渡される予定となっていることから、30年度末在庫量は26.2千トン(前年度末比+3.2千トン)となる見通し。

	生乳生産量(見通し)						生乳供給量(見通し)						(千トン,%)
	全国		北海道		都府県		生乳供給量		飲用等向		乳製品向		
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比		
第1四半期	1,890	100.7	1,017	103.0	872	98.3	1,877	100.7	1,040	99.9	837	101.8	
第2四半期	1,797	100.3	1,004	102.8	793	97.4	1,785	100.3	1,046	100.0	738	100.8	
第3四半期	1,772	98.8	974	100.3	798	97.0	1,760	98.8	1,013	99.8	747	97.5	
第4四半期	1,808	98.8	985	100.4	824	97.0	1,796	98.8	966	99.6	830	98.0	
上期	3,687	100.5	2,021	102.9	1,665	97.8	3,662	100.5	2,086	100.0	1,575	101.3	
下期	3,581	98.8	1,959	100.4	1,622	97.0	3,557	98.8	1,980	99.7	1,577	97.7	
年度計	7,267	99.7	3,980	101.6	3,287	97.4	7,218	99.7	4,066	99.8	3,152	99.5	

	牛乳等生産量(見通し)										(千kl,%)	
	牛乳類		牛乳		加工乳		成分調整牛乳		乳飲料			はっ酵乳
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比			
第1四半期	1,194	99.1	789	100.5	22	95.1	86	95.7	297	96.7	285	102.2
第2四半期	1,230	99.7	786	100.2	22	98.2	92	98.0	330	99.3	277	101.8
第3四半期	1,169	100.3	783	99.7	24	99.0	83	98.7	279	102.7	260	100.5
第4四半期	1,089	99.4	735	99.4	22	93.5	79	101.2	253	99.5	265	100.5
上期	2,424	99.4	1,575	100.4	44	96.6	178	96.9	626	98.1	562	102.0
下期	2,257	99.9	1,518	99.5	45	96.3	162	99.9	532	101.2	526	100.5
年度計	4,682	99.6	3,093	100.0	90	96.4	341	98.3	1,158	99.5	1,088	101.2

需給動向を踏まえた当面の課題と対応について

1. 生乳生産基盤の強化に向けた取り組み

30年度の生乳生産量は、北海道では生産の主力となる2～4歳の乳用牛頭数の増加が見込まれることから、通年で前年を超えて推移する見通し。また、都府県では、畜産クラスター事業や地域における生産基盤強化の取り組み等の効果が徐々に現れ、0歳(0～11ヶ月齢)頭数が昨年10月から前年を超えて推移しているものの、2～4歳の乳用牛頭数は依然減少が続くことが見込まれることから、生乳生産は、通年で前年を下回り推移し、特に夏場以降は減少幅が拡大する見込み。これらの結果、全国の年度計では7,267千トン・前年比99.7%の見通し。

このような状況を踏まえ、国及び酪農乳業関係者が一体となり、生産基盤強化の取り組みについて、更なる推進が必要。なお、都府県においては、引き続き乳用後継牛を計画的に確保する取り組みを推進するとともに、今夏が暖候期予報(6～8月)では気温が高い予報となっていることから暑熱事故の防止策に努めることが重要。

2. 飲用牛乳市場の安定に向けた需給調整の取り組み

飲用牛乳市場にあつては、都府県における生乳生産量が引き続き減少するなか、生乳流通の地域的構造変化に伴う、北海道からの広域流通生乳への依存度が高い状況が続く見通し。

特に飲用牛乳等向け生乳の需要期にあつては、台風等の天

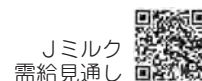
候不順や猛暑による大幅な需給変動によっては生乳や製品流通への影響も懸念されることから、広域流通生乳や製品の弾力的な供給を通じた需給調整について、全国の酪農乳業関係者が一体となり、早期に取り組むことが求められる。

こうした飲用需要期における構造的課題については、次年度以降も続いていくことが想定されるため、国及び酪農乳業関係者が一体となり喫緊に対応策を構築していくことが必要。

3. 乳製品需給の安定への取り組み

30年度の脱脂粉乳・バターの国内生産量はともに前年並みの見通し。また、30年度の輸入予定数量(脱脂粉乳27千トン、バター13千トン)については、需給に対応した必要量が定期的に売り渡される予定であることから、本年度の乳製品需給は安定して推移する見通し。

このような状況のなか、国及び酪農乳業関係者は今夏の天候要因による生乳需給への影響を注視するとともに、国産乳製品の需要が高く、その安定供給が求められていることを踏まえ、生産基盤強化の取り組みに加え、市場からの信頼確保に努めるべく、小売業界及びユーザーに対して適宜的確な需給情報を提供することが必要。



脱脂粉乳の需給(見通し)

(千トン,%)

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し C	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B +C-D	前年比
第1四半期	65.1	134.7	34.0	104.2	0.6	66.9	5.8	128.6	32.9	99.1
第2四半期	66.9	128.6	25.8	102.2	4.0	58.7	5.1	114.3	37.9	107.7
第3四半期	58.7	114.3	28.0	92.4	6.0	57.6	5.0	102.6	35.1	96.7
第4四半期	57.6	102.6	33.3	99.7	6.0	63.4	5.5	97.4	33.5	100.5
上期	65.1	134.7	59.9	103.3	4.6	58.7	5.1	114.3	70.8	103.6
下期	58.7	114.3	61.3	96.2	12.0	63.4	5.5	97.4	68.6	98.6
年度計	65.1	134.7	121.1	99.6	16.6	63.4	5.5	97.4	139.4	101.0

バターの需給(見通し)

(千トン,%)

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し C	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B +C-D	前年比
第1四半期	23.0	93.9	17.5	104.1	3.2	26.5	4.5	96.8	17.2	111.2
第2四半期	26.5	96.8	12.9	102.2	5.9	28.3	4.8	109.8	16.9	107.0
第3四半期	28.3	109.8	12.4	92.4	3.5	23.3	4.0	106.0	21.0	97.8
第4四半期	23.3	106.0	17.2	99.7	3.0	26.2	4.4	113.9	17.3	96.5
上期	23.0	93.9	30.3	103.3	9.1	28.3	4.8	109.8	34.1	109.1
下期	28.3	109.8	29.7	96.5	6.5	26.2	4.4	113.9	38.3	97.2
年度計	23.0	93.9	60.0	99.8	15.6	26.2	4.4	113.9	72.4	102.5

酪農乳業産業基盤強化特別対策事業（H29～31年度）の経過報告

毎号連載で経過報告いたします

平成29年度実績報告

乳用牛資源緊急確保事業は、乳牛の生体輸入という新たな事業に取り組む中、防疫上の課題等により想定よりも輸入頭数が減少した。地域生産基盤強化支援事業は、各々の地域における課題へ対応するため企画提案型の事業とし参加を募ったが、各地域における29年度予算が既に決定済みであったことや、国事業と関連する内容や施設整備に係る取り組みを対象外とするなど事業の要件がやや厳しかったこともあり、採択件数は9件（3,100万円程度）に留まった。また、措置したメニューのうち、更新経産牛有効活用対策も、経産牛取引特有の困難さもあり、当初計画に対して実績は3割程度（470万円程度）になった。

（1）酪農生産基盤強化事業

①乳用牛資源緊急確保事業（乳牛輸入）

乳用牛を輸入・供給する事業実施主体に助成を行う本事業は、全国農業協同組合連合会、全国酪農業協同組合連合会、熊本県酪農業協同組合連合会が事業実施主体となり、初妊牛354頭、育成牛353頭の計707頭を国内に供給（表1）し、約8,100万円を助成した。防疫上の課題等により実績は計画を下回ったものの、国内外の各段階での適切な対応により、安全な生体のみが国内に供給された。

表1.平成29年度乳用牛資源緊急確保事業の実績

		全農	全酪連	熊本県酪連
輸入時期	第1期	29年7月24日着 29年8月9日解散	29年6月13日着 29年6月29日解散	29年9月19日着 29年10月5日解散
	第2期	29年12月4日着 29年12月20日解散	延期 (29年度は1期で終了)	29年11月13日着 29年11月30日解散
輸入牛種類		育成牛	初妊牛	第1期:育成牛 第2期:初妊牛
供給頭数		第1期:217頭 第2期:45頭 計262頭	第1期:167頭 第2期:- 計167頭	第1期:91頭 第2期:187頭 計278頭
全体で、初妊牛354頭、育成牛353頭、総計707頭				

表2.平成29年度地域生産基盤強化支援事業 実績取り纏め表

地域	1.生産基盤強化の改善・指導				2.生産基盤強化支援対策の推進								助成額合計	
	(1)会議開催		(2)研修会開催		(1)提案型生産基盤強化対策		(2)乳用牛育成基盤強化対策			(3)更新経産牛有効活用対策				
	件数	助成額	件数	助成額	件数	助成額	件数	施設数	申請頭数	助成額	件数	助成額		助成額
北海道	0	0	0	0	0	0	9	20	20,825	20,868,336	3	52	962,988	21,831,324
東北	1	7,732	0	0	1	3,125,025	2	3	740	1,987,194	1	8	148,152	5,268,103
関東	1	70,448	0	0	2	2,437,220	4	9	2,304	4,886,502	1	26	481,494	7,875,664
北陸	2	158,148	2	209,947	0	0	0	0	0	0	2	17	314,823	682,918
東海	1	189,808	1	606,576	1	4,628,610	2	4	853	2,369,634	0	0	0	7,794,628
中国	0	0	0	0	3	3,090,942	1	1	540	1,500,120	0	0	0	4,591,062
四国	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
九州	1	353,630	0	0	1	4,628,848	3	5	1,821	4,005,876	1	149	2,759,331	11,747,685
合計	6	779,766	3	816,523	8	17,910,645	21	42	27,083	35,617,662	8	252	4,666,788	59,791,384

酪農乳業産業基盤強化特別対策事業の収支報告

29年度は、基盤強化対策金116社、基盤強化特別対策金38社の皆様のご同意を頂き、目標の5億円に対して4.92億円の基金を造成。平成30年9月に開催する理事会において、乳業者別の拠出状況について報告・公表について協議する予定。事業費のうち75%を生産基盤強化に支出。なお、繰り越となった約3億円の基金は平成30～31年度事業の新規事業等で支出する。

「牛乳は生きている」～風味変化問題への取り組み～

酪農生産現場向けリーフレットや子どもたちの学習活動に活用できる教材などを制作

風味変化問題への取り組みにおいては、酪農乳業の使命である「安心して飲食できる牛乳・乳製品を消費生活者の皆さまに送り届ける」ことが大前提であり、製品を市場に供給するミルクサプライチェーンのそれぞれの拠点（生乳生産現場、集乳車両、中継施設、乳業工場、中継冷蔵庫、配送者、保管冷蔵庫など）において各々の立場でリスク要因排除に取り組むことが最重要である一方、生乳自体が持つ異味異臭は実際に存在することから、30

年度は酪農生産現場向けリーフレットを制作します。

また、学校教育関係者の皆様にも「牛乳の農産物としての特性」を理解して頂くことが必要であることから、学校の教職員が授業等で子どもたちの学習活動に活用できる教材や、酪農乳業関係者の皆様が学校現場にアプローチする際の使用を想定したツールなども制作します。

会員の皆様におかれましては、同リーフレットや教材等の活用をお願いします。

New Contents

生産者向けリーフレット

ミルクサプライチェーンのそれぞれの拠点でのリスク要因の排除が最重要であることから、まず第一弾として、生産現場における異味異臭発生要因を少しでも減少させることを目的に、生乳の風味変化や異常事例等を分かりやすく紹介する内容のリーフレットを制作します。

8月には、生産現場を中心に、酪農乳業関係者の皆様にも配布させていただく予定です。



小学校向け食育教材

Jミルクでは、学校給食における牛乳の風味変化問題への対応として、関連した教材制作を行っています。本教材は、味覚の基本や牛乳の特性を学校教育関係者に理解してもらうためにJミルクで専門家の協力により作成した資料「牛乳は生きている」を、学校現場の教職員が児童への食育活動で活用しやすいよう教材として制作します。

牛乳が、季節や気候、産地、エサの種類などによって個々に違いのある農産物としての特性や、栄養豊富で傷みやすい食品であるからこそ、おいしく、安全・安心に届けるための工夫や努力についての理解を深めることを目的に、学校教職員による小学校3～4年生の食育活動での材料として活用してもらうことを想定しています。

制作にあたっては、牛乳食育研究会の会員で、Jミルクが実施する学校教職員向け研修会の講師も務め、食育実践の第一人者として文部科学省の食に関する指導資料の作成にかかわる藤本勇二・武庫川女子大学講師の監修により、小学校現場の意見も参考にしながら、児童用・教師用資料を作成します。

8月には酪農乳業関係者にも案内し、小学校の2学期に向けて配布させていただく予定です。

酪農乳業関係者向け「食育推進研修会」

本年、8月28日（火）には、TKPガーデンシティPREMIUM神保町（東京都千代田区）で、酪農乳業の食育や普及等にかかわる関係者を対象とした「酪農乳業食育推進研修会」を開催します。

昨年12月に行った同研修会では、学校給食における風味変化問題への対応について、酪農乳業と学校との食育活動を通じた連携をテーマに開催したところ、大変多くの関係者に参加いただきました。

今回の研修会では、昨年の内容から、より踏み込んで具体的な学校との食育活動における連携について、学校現場での児童への食育活動、酪農乳業関係者自らが実施する食育活動を通じた学校教職員や子どもへのアプローチなど、各段階での展開内容について提案しながら、今後の具体的な活動について考える機会として開催します。

食育推進研修会の概要

開催日時：平成30年8月28日（火）13:00～16:30（受付開始12:30）

開催会場：TKPガーデンシティPREMIUM神保町〔プレミアムボールルーム〕

対象：酪農乳業の企業・団体、県普及組織、国や自治体などで食育や普及活動にかかわる酪農乳業関係者

定員：100名

産地の見える牛乳で、進化する乳和食とともに

永利牛乳が牛乳月間に「乳和食ワークショップ」を開催！

お母さん牛のいのちの恵みが牛乳なんです

日本初の乳和食レストラン「まきばの家」は、福岡県筑前町の永利牧場内にある。その徒歩圏内に牛舎と牧草地があり、綺麗にブラッシングされた乳牛約160頭が暮らしている。訪れる人々は、産地の見える「永利牧場の牛乳」に親しみをもちながら、産地だからこそ気づく牛乳の大切さを感じ、乳和食を楽しんでいる。

長谷川敏社長が乳和食を知ったのは約5年前。Jミルクで乳和食を本格的に取り組み始めた頃だ。「これはいい」と、同社専務取締役である奥様へその情報をお伝えし、J

ミルクの乳和食セミナーを受けていただいたのがきっかけ。「牛乳を知ってもらうためのアンテナショップ」は、今も進化を続けている。

牛乳月間の6月に「小山先生と一緒に！乳和食ワークショップ」を開催して今年で4回目となる。毎年新たなプログラムを考案[※]し、乳和食を普及している。初回から参加している親子や県外からの業界関係者など約50名が集まった。和気あいあいとした雰囲気の中で牛乳の美味しさと栄養価値を知り、終了後に参加者同士が笑顔で語り合っている姿は、見ている方も笑顔になる場面の一つだった。

※乳和食ワークショップのプログラムを一部ご紹介！

1. 乳和食サイトに掲載の基本動画レシピ5点を視聴
2. “ミルクだし”の飲み比べ4種
3. デモンストレーションと実習
4. 講義



すぐ目の前のデントコーン畑から取った葉をお皿に(左)。永利牛乳の皆さんのあたたかさが伝わる1枚。イベント終了後に、関係者と「牛乳で乾杯！」写真を撮影(上)。

おいしく減塩！乳和食レシピ

5種の具材と
自家製ミルクだしで楽しむ

ごちそう冷や汁

今回は暑い夏の熱中症予防におすすめのとおきのレシピをご紹介します。ミルクだしがベースの栄養満点の冷や汁です。具はお好みのものをのせてください。ささみ缶を利用すれば、加熱調理なしで更に手軽に作れますよ。夏の疲れた体を元気にしてくれるミルクの栄養がぎゅっと詰まった一品です。是非、作ってみてくださいね。(レシピ：料理家・管理栄養士 小山浩子氏)

乳和食
サイト
QRコード



材料 (2人分)

牛乳 …………… 200ml
中華スープの素 …… 小さじ1/2 (顆粒)
味噌 …………… 大さじ1
白すりごま …… 大さじ2
米 …………… 1 合
鶏ささみ …………… 大 1 本
※鶏ささみは筋をとり、観音開きにする

酒 …………… 大さじ1
みょうが …………… 2本(千切り)
しょうが …………… 1片(千切り)
トマト …………… 1個(1cm角)
きゅうり …………… 1/2本(輪切り)

作り方

- 1 Aを合わせておく。
- 2 鶏ささみに酒をかけ、電子レンジ(500W)で1分加熱する。そのまま冷まし、身は手で細かくほぐし、蒸し汁はAに加える。
- 3 器にごはんを盛り、鶏肉と野菜をトッピングし、Aをかけながら頂く。

酪農乳業の課題と持続可能な開発目標 (SDGs) の関わり

日本の酪農乳業とSDGsの17項目を結びつける

2015年9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のため2030年アジェンダ」(図1)はFAO(食糧農業機関)をはじめとする国連機関や関係団体、政府などが広報活動を行い、民間企業や自治体等各団体組織においてCSR(社会貢献)という観点から目標を設定して取り組みを始めており、ご存知の方も多々と思います。

その内容としては下のカラフルな図にある持続可能な開発目標17ゴールとそれぞれの中の詳細に渡る169ターゲットで構成されており、先進国をも対象



にした「グローバルな2030年に向けたアジェンダ目標」であり、国や政府だけでなく地球に暮らす一人ひとりの意識と行動が求められ、「誰も置き去りにしない」「leave no one behind」というスローガンのもと、あらゆる場所のすべての人々に対するリーダーたちの約束であります。

ここで、我が国の酪農乳業と持続可能な開発目標 (SDGs) のつながりについて考えてみたいと思います。

酪農乳業には、酪農場から食卓までのミルクサプライチェーンにおける各工程で、持続可能であることが求められる項目があると思います。

例えば酪農は、1年間にわたり生乳を生産し続ける「持続可能な」農業(仕事)の典型であると言えるのではないのでしょうか。米などの穀物や野菜、果物といった作物であれば収穫回数や時期が年1回~数回に限られるため、作業期間も集中し、出荷後は次の「収穫」までの期間が空き、必然的に収入も大きく変動します。その点365日通して牛を飼養管理し、毎日欠かさず朝夕2回(時には昼も)乳を搾り、生産された生乳を毎日出荷する酪農は、持続的に安定した収入が見込める、といった特徴があります。実はこのように安定的に収入を得られることは開発途上国における就農で、とても大切なアドバンテージになっています。(SDG目標1番、9番)

また、力仕事などの重労働もある一方で、乳牛の分娩に立ち会い子牛の世話をし、生鮮食品(生乳)の衛生的な取り扱いから、さらに家計管理などで女性が活躍できる職場として位置づけられます。(SDG目標5番)

このように我が国の酪農乳業とミルクサプライチェーンにSDGs 17項目を照らし合わせ、今後取り組むべき課題を検証するとともに、日本が他国に先駆けて取り組んでいる、もしくは既に目標達成している目標項目などから、新たに日本酪農乳業の役割・価値も見いだせると考えます。

日本国のミルクサプライチェーンに合った持続可能な開発目標 (SDGs) を考える

我が国のミルクサプライチェーンを、生乳生産⇒ 集送乳⇒ 生乳処理・牛乳乳製品製造⇒ 保管・配送⇒ 販売店⇒ 消費、というプロセス(図2)それぞれを、経済、社会、環境の3つの側面を考慮しながら、解決すべき課題目標をSDGs17項目(169ターゲット)の目標と照らし合わせて落とし込むことで、日本が取り組むべきSDGs(目標)を設定できます。また、多くの国に先がけて既に取り組みされている内容については、さらに高いレベルに向けて発展させることも可能です。

図3は「酪農場(生乳生産現場)を例にした持続可能な開発(発展)目標(SDGs)案です。内容としては、以下のような結びつきになります。

- * 需要に見合った持続可能な生乳生産⇒ SDG 12番(つくる責任、つかう責任)、2番(持続可能な農業を推進)
- * 小児から高齢者への健康に寄与する栄養価値の高い食品の生産⇒ SDG 2番、3番(食糧の安定確保と栄養状態の改善)
- * 水の効率使用・保全⇒ SDG 6番(ちなみに水の効率的な使用はチェーンを通じて共通)
- * 天災・震災など気候変動に耐える足腰の強い農業経営⇒ SDG 13番

Jミルクといたしましては、生・処・販という観点でミルクサプライチェーン(バリューチェーン)を通しての持続可能な開発目標への取り組みが、いかなるものかを会員の皆様と考えていければと思います。

図2: 我が国のミルクサプライチェーン

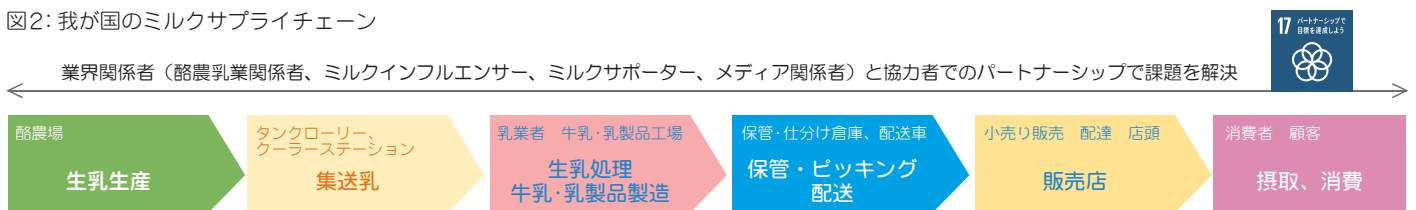
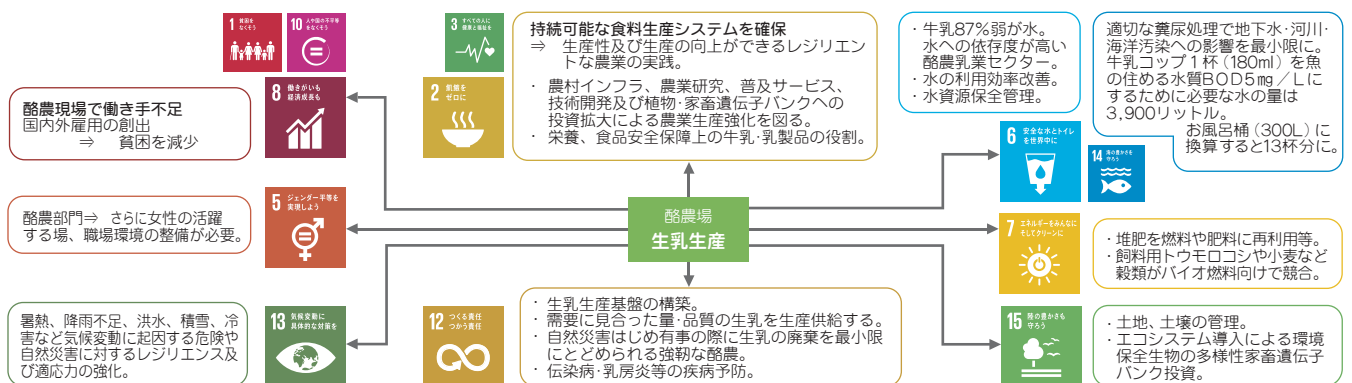


図3: 酪農場 生乳生産現場を例にした持続可能な開発(発展)目標(SDGs)案



IFCN Dairy Conference 2018 最新レポート

竹下 広宣 氏 (名古屋大学大学院 生命農学研究科 准教授)



第19回IFCN Dairyカンファレンスが6月にアイルランドのコークにて開催された。「酪農技術の過去、現在、将来」をテーマとし、3日間にわたり、現在の技術や今後求められる技術について議論が交わされた。技術の価値を考える際、重要な視点に据えられたのは、「持続可能性とレジリエンス」であった。このため、生産性向上に寄与する技術であっても、それが経済効率的であり経営の健全性を改善するものであるのか、または、酪農の魅力を高め、酪農乳業の持続可能性を高めるものであるのか、といった点に関心が寄せられた。

そもそも酪農乳業に持続可能性がなぜ求められるのか？この根本的な問に対する答えとして、IFCNはMary Shelmanが示した次の7つを紹介した。①消費者が望んでいる、②取引相手が望んでいる、③雇用者を惹きつける、④コストを下げる、⑤差別化を生み出す、⑥株価を上昇させる、⑦そもそも製造業は満たすべきである。では、持続可能性の追求を是として、実際に持続可能性をどのように測るべきか？この論点について、IFCNは環境、経済、社会という3つの次元について測ることを提案し、併せて、DSF (Dairy Sustainable Framework)基準とSDGsを示した。DSF基準とは、酪農乳業バリューチェーンが持続可能性の



問題に取り組む際に考慮すべきリストであり、次の11からなる。①温室効果ガス排出、②土壌成分、③廃棄物、④水、⑤土壌、⑥生物多様性、⑦市場の発展、⑧地域経済、⑨労働条件、⑩製品の安全性と品質、⑪アニマルケア。

さて、IFCNは環境、経済、社会の持続可能性の測定を提案していると先述したが、その具体的指標も示したので紹介する。まず、酪農経営者にとって最重要と位置付けられるであろう経済持続可能性は費用を、次に、環境持続可能性は温室効果ガス排出量を、最後に、社会持続可能性は労働1時間あたりの農家所得(デカップル型補助金含む)と全国最低賃金との差をもって測るというものである。このような指標の国際統一が図れば、世界で共有できる問題の解決に向けて有用であろう。しかし、日本の酪農の持続可能性を検討する際に、他の国々とは異なる点が問題となるようであれば、日本独自の指標を追加して差し支えない。これはDSF基準を取り入れる場合でも同じである。

ただし、何をどの尺度を用いて測るべきか、この議論は、日本の酪農経営について描く将来像に依存するものである。そして、この将来像をどう描くかが肝要になるであろう。

竹下 広宣 氏

名古屋大学大学院 准教授

2004年、京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻博士後期課程修了、日本学術振興会特別研究員、フィレンツェ大学客員研究員、日本大学生物資源科学部准教授等を経て、2016年名古屋大学大学院生命農学研究科准教授。



今後のスケジュール



オランダ・カナダ酪農乳業現地調査(下記研究会の開催における海外現地調査)

日 時:平成30年9月3日(月)~9月16日(日)(予定)

内 容:わが国にとって有益な比較論点の確認、及びスピーカーからの確な情報を引き出すため、対象国の現地調査並びにスピーカーとの打ち合わせを実施する。



平成30年度酪農乳業の国際比較研究会の開催

開催日時:平成30年11月29日(木)10:30~17:45(終了後、懇親会あり)

開催会場:TKPガーデンシティPREMIUM京橋(ホール22A)

概 要:国際会議形式(同時通訳付き)

参加費:無料(交通費等は各自負担)/定員:200名/参加対象者:酪農乳業関係者、研究行政メディア等

明治150年関連施策「酪農乳業産業史を活用した競争力強化事業」の経過報告

明治以降の歩みを次世代に遺すことや、明治の精神に学び、日本の強みを再認識することが重要。

平成30年(2018年)が明治元年(1868年)から起算して満150年に当たることを記念し、近代化の歩みが記録された歴史的遺産を後生に遺し、日本の技術や文化といった強みを再認識し、現代に活かすことでさらなる発展を目指す内閣官房「明治150年」関連施策が、政府をあげて推進されている。こうしたことから、Jミルクとしても、30～31年度の2年間事業として「酪農乳業産業史を活用した競争力強化事業」をスタートさせた。

具体的な取り組みとしては、①「乳の学術連合・乳の社会文化ネットワーク」に参加されている研究者などを中心とする学識経験者からなる「酪農乳業史料収集活用事業推進委員会」を30年4月5日に立ち上げ、②酪農乳業産業史の変遷がわかる史料等を収集し、デジタル化することで、誰でも閲覧できるアーカイブスの構築、③近代日本における酪農生産の初期的展開を明らかにするため、地方都市における市乳並びに農乳(煉乳)の生産と流通にかかるフィールドワーク(調査)を実施、④収集した史料等及び知見をもとに、展示パネルや酪農乳業の発展について学ぶ教材などの制作物を作成し、学習型シンポジウ

ムを30年11月21日に開催予定です。

つきましては、推進委員による史料等収集や地方都市におけるフィールドワーク(調査)への会員の皆様のご理解・ご協力とともに、ご提供頂ける史料等がありましたら、担当者までご連絡ください。

[担当] Jミルク生産流通グループ 小沼 翼

[Email] t-konuma@j-milk.jp

酪農乳業史料収集活用事業推進委員会 委員名簿

氏名	所属
安宅 一夫	酪農学園大学名誉教授
江原 絢子	東京家政学院大学名誉教授(乳の社会文化N T副代表幹事)
尾崎 智子	同志社大学人文科学研究社外・嘱託研究員 四日市大学経済学部非常勤講師・関西福祉大学兼任講師 (乳の社会文化N T会員)
近藤 智	食品技術コンサルタント
佐藤 奨平	日本大学生物資源科学部専任講師
堂迫 俊一	NPO法人チーズプロフェッショナル協会 副会長
橋爪 伸子	同志社大学経済学部非常勤講師(乳の社会文化N T会員)
平田 和泉	元・オーム乳業
深澤 朋子	早稲田大学スポーツ科学研究センター 招聘研究員
細野 明義	信州大学名誉教授(乳の社会文化N T会員)
百木 薫	一般社団法人Jミルク 事務局長
矢澤 好幸	日本酪農乳業史研究会 常務理事
和氣 孝	元・アイスクリーム協会専務理事
和仁 皓明	西日本食文化研究会主宰(乳の社会文化N T幹事)

Find New (特設サイト)

牛乳乳製品の知識・改訂版をウェブサイトで分かりやすく掲載いたしました。スマホのホーム画面にぜひ追加ください。



サイトはこちら



あたらしいミルクの研究2017年度(パンフレット)

平成28・29年度の学術研究報告会で表彰された計9件の研究成果(健康科学、社会文化、食育)をわかりやすく要約しました。



ダウンロードはこちら



J-Milk Schedule

8月1日以降の会議・行事の開催予定

- 8/ 8 (水) 第3回学乳問題特別委員会拡大委員会
- 8/17 (金) 「乳の社会文化」学術研究報告会
- 8/23 (木) 牛乳食育研究会幹事会
- 8/23 (木) 「食と教育」学術研究報告会
- 8/未 第1回明治150年シンポジウム検討委員会
- 8/未 第1回課題検討委員会

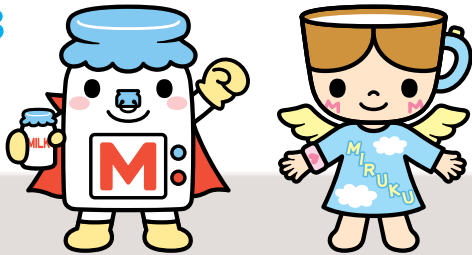
- 9/13・14 (木金) 牛乳食育研修会(山形)
- 9/20 (木) 第3回理事会・懇親会
- 9/未 第3回需給委員会
- 9/未 第1回生産流通専門部会

- 10/12 (金) GDP年次会議(韓国デジョン)
- 10/13・14(土日) IDF 常設専門委員会(同上)
- 10/15-19(月金) IDF ワールドデーリーサミット2018(同上)
- 10/18・19(木金) 牛乳食育研修会(神奈川)
- 10/24 (水) おいしいミルクセミナー兵庫※

- 11/21 (水) 明治150年記念シンポジウム(仮称)
- 11/29 (木) 平成30年度酪農乳業の国際比較研究会

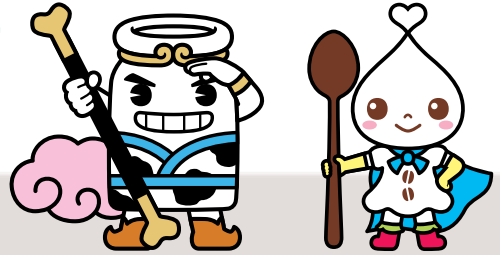
※主催：日本乳業協会、共催：中央酪農会議、Jミルク

第1回
2013



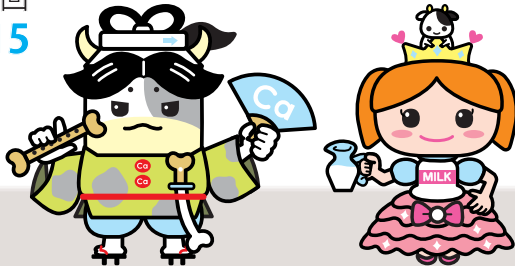
パワーアップ牛乳マン ミルクマグカップちゃん

第2回
2014



ミルク空（みるくう） ミルティーちゃん

第3回
2015



牛乳丸（うしちまる） ミルちゃん

第4回
2016



ミルク三銃牛（みるくさんじゅうし） ミルばあちゃん

第5回
2017



ミルク丸 みるきゅん

第6回
2018



応募作品
募集中!

第6回 牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール

FAOにより提唱された6月1日の“World Milk Day”を起点に、全国の小学生から「牛乳ヒーロー & ヒロイン」のキャラクターの絵を募集しています。応募1作品につき「50円」をJミルクから「FAO 飢撲滅草の根募金」に寄付させていただきます。

締切り：2018年 9月30日(日)消印有効

表彰式：2018年12月 8日(土)東京都内(予定)

※過去のキャラクターのデータはHPからダウンロードできます。

応募方法は
こちら



このたびの西日本を中心とした豪雨において被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。被災地の日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。6月の「牛乳の日・牛乳月間」では多くの皆様に「愛してミルク？」ツールを活用いただき、取材にもご協力賜りましたこと、深く感謝申し上げます。取材では、どの地域においてもあたたかく迎えて下さり、ありがとうございました。お揃いのTシャツを着用して県庁訪問やイベントに参加したり、今年5月に取り組みを知り、立案・実行された牛乳贈呈式もありました。「牛乳月間は6月だけじゃないよ」というお言葉も頂き、「毎日が牛乳の日」と胸に刻んだ今年の「牛乳の日・牛乳月間」でした。業界が一体となる広報活動をこれからも続けていきたいと思ひます。

J-milkレポート vol.29 発行日/2018年7月 編集・発行/一般社団法人 Jミルク

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階 TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>  <https://www.facebook.com/jmilkjp/>